明治時代のピューリタニズム観

今井　宏

(一)

本稿は筆者の「明治時代におけるイギリス革命観」（東京女子大学比較文化研究所『紀要』第二十六巻、一九六八年）の続稿である。さきの小論において筆者は、「イギリス革命観を問うことは、より本質的には、イギリス史の発展過程がいかなる価値基準によって裁断されているか、そしてその発展過程において十七世紀の二つの革命がどのように位置づけられているかを問うことである」とする基本的な視角に立ち、(一)加藤弘之と福沢諭吉に代表される、いわゆる「啓蒙」段階のそれ、(二)外山正一にひとつの範例を見出すことのできる自由民権運動のそれ、(三)徳富蘇峯に始まり竹越与三郎において最初のクロムウェルの伝記を生んだ民間史学のそれ、の三者を主たる考察の対象とした。そして(一)の「啓蒙」段階においては、フランス史およびフランス革命に対する認識とはおよそ対照的な立憲君主政体の母国というイメージが、イギリスの場合にはすでに定着しており、しかもこの時期がまさに本国における「ホイッグ史観」の整備・確立の時期と一致していたがゆえに、これから後のイギリス史に対する認識に決定的な影を落とすことになったことを指摘した。そしてこの「ホイッグ史観」は、自由民権運動の高揚に適合的な「悪虐不道ノ君王ガ圧制」に対する「自由ヲ唱ヘ民権ヲ主張スル」議会という対立パターンとして、第二段階に継承・深化されたが、名誉革命の歴史的意義の強調の蔭にピューリタン革命が埋没するというこの史観のもつ限界をそのまま伝達していた。しかし本国においては、この「ホイッグ史観」の亜流として革命の宗教的要素を強調する「ピューリタン史観」が、トマス・カーライルを輝ける担い手とし

て展開し、「神から仕わされたピューリタンの英雄」クロムウェルの存在がクローズ・アップされてくる。㈢の段階の注目すべき業績たる竹越与三郎の『格朗空』（クロムウェル、明治二十三（一八九〇年））は、主人公に対する把握の足場を、蘇峯の「田舎紳士」プラス「ピューリタニズム」に求めたものであった。

このようなイギリス革命観の展開過程において、特異な存在を占めているのは、木下尚江のそれの変遷である。クロムウェルによる国王処刑という史実との遭遇にショックをうけた少年尚江は、そのイギリスに対する認識において一種の挫折を体験し、自由民権運動から生まれた「革命」への展望が閉ざされしかもキリスト教にとっても「暗い谷間」の時期であった明治二十年代後半になると、しみじみと「時代の変遷」を味わうことになる。そしてクロムウェルの「現われた事業よりも、其の潜んでいた彼の霊熱に酔ふ」のであった。しかし「霊熱に酔ふ」クロムウェル像をわが国に定着させたのは、木下尚江の仕事ではなかった。そこで本稿では、イギリス革命のイデオロギーをもっぱら「民権」の拡張に求めるホイッグ史観ではなく、「ピューリタン」革命としての宗教的要素の果たす役割りについての評価がどのようにして伝えられ、また定着していったかを、見届けることにしたい。もとよりわが国のキリスト教史の全貌の中においてこの問題を展開することは筆者のよくしうるところではないが、ピューリタリズムおよび「ピューリタン史観」のわが国への伝達と受容の過程にみられる代表作を紹介し、その極点ともいうべき内村鑑三のピューリタンおよびクロムウェル理解を主題に分析することが、本稿の課題である。

おそらく一冊の単行本としてわが国にピューリタンを紹介した最初のものは、明治二十二（一八八九）年十一月に大阪福音社から刊行された、増野悦興『英国清教徒紀事』（四六判、一八〇ページ）であろう。著者増野悦興については、審かにすることができなかったが、熊本バンドの出身で新島のあと同志社の校長を勤め日本組合基督教会の中心人物であった小崎弘道が本書に序文を寄せ、「悦興増野君は基督教徒中に在て殊に英国清教徒の遺風を慕ひ、身自ら清教徒の行を行ひ、清教徒の実を顕はす人なり……君が曽て九州日向の地に在て伝道に従事するや……」と書いているところからみて、組合教会派の牧師であったと推測される。(1) この推測を助ける材料は、本書においては「清教徒の起因」

が分離派ピューリタン（増野の言によれば「分裂教徒」）に求められ、「此等の輩はカートライトの云ふ如く、公の儀式は偶像の礼拝の余風にして監督を立つるの政治は聖書に背くものなりと主張し、己は只主の自由の民なれば福音の友の集れる教会なるものを作為せんと企てたり、時人之を呼てブラオン派と称へ、或は『コングレゲーション』と称ふ、是則ち後日の清教徒なり」[2]としている個所である。じつに増野にとって本書は、自らの信仰の原点の確認のためのものであった。本書の執筆意図としてかれは、「本書の著者も亦清教徒を欽慕する者の一人なり。彼徒の凛乎たる精神と、高尚なる心事とは、取て以て自習の摸範（ママ）となさんと欲する所そして其純潔厳正なる主義は、我前途の生涯に於て、一個の国民としては、之を我社会に主張し、一個の教徒としては、之を我教会に主張せんと期する所なり」[3]と書いている。

それでは増野のピューリタニズム認識の材料はいったい何であったろうか。信仰者としてのかれについて窺うに足る材料は、前述のとおり遺憾ながら持ち合わせていないが、少くとも本書は「僅か一二の英国史に就き、匆卒の間に其要を抄訳し、其文辞を修飾したるに過ぎざる」ものであったし、しかもかれはその「僅か一二の英国史」が何であったかは明示していない。しかしながら、冒頭で記した本稿の視角にとって無視することのできない点は、「我友竹越与三郎君、嘗て基督教新聞記者たるの日、清教徒の事迹につき筆記し置かれたるものあり、今此著を為すに当り著者に贈らる。此小冊子の成る実に同君に負ふ所少からざるなり」[4]と述べている点である。じつに本書は、かの明治二十年代前半におけるイギリス革命解釈の最高の達成たる、竹越与三郎の『格朗宕』の前年に刊行されたものであり、しかも材料の提供者も竹越なのである。これは竹越がこの段階におけるイギリス革命研究における傑出した存在であったことを示すのみならず、逆に本書をみる場合の比較的視点を提供することになるであろう。

本書の内容を要約するならば、ピューリタンを中心に据えた、エリザベスより王政復古にいたる通史ということができる。そして執筆のライトモチーフとなっている増野のピューリタン観は、「彼の十六世紀の下半紀、エリザベス女皇治世の後半世より、十七世紀の終に渉り、英国の人心に一大変動を生じ、延ひて社会政治の表面に及び、千古未曾有の一時期を開き、其余波の及ぶ所、一たび漲ては英民の子孫を万世に感化するの原動力となり、二たび漲ては自由の邦国を大西洋の彼岸に現出するの種子となり、三たび漲ては千載の下なる今日に於て、其事迹の伝はる所、聞く者をして奮然蹶起己む能はざらしめ、政治の社会に独立自由の志気を鼓舞し宗教の社会に謹厳清節の精神を振起し、青史と

共に芳香を無究に垂るる、彼の清教徒の事迹の如く傑大なるものあるを見ざるなり」[5]という個所につきている。このような増野の姿勢から、ピューリタンに対する過大評価が生まれてくることは避けられなかった。たとえばジェームズ一世の時代に「英国の清教徒は当時其国に在る新教徒総数の四分の三を占め」るとしたり、ロードの政策が「当時全人口の十分中九分を占める清教徒」を攻撃するものであったとする如きがそれであり、[6]より大局的には「グロショスが当時の状態を評し『神学英国を治む』と云ひしも敢て溢言にあらず一言以て之を言へば、全英国唯一の教会なりしなり、之より（エリザベス朝）以後無期議院（長期議会）に至る迄を総称して清教徒の時代と云ふ。何となれば清教徒の主義、英国を支配したるが故なり」[7]（（　）内引用者）という把握がそれである。かかる過大評価を基軸に構築されている本書のピューリタン像には、また小崎弘道の「序」にみられるような「我邦維新以来百事更始の際、四維乱れ徳教地に落ち、浮薄以て風を為す、為に一個人に於けるも一家に於けるも一国に於けるも依て以て立つ所の基なく、人々向ふ所を知らず、実に道徳世界の壊乱を極むるの時なり、此渾沌たる道徳世界に於て『光あれ』と叫ぶ者は唯清教徒の余流を汲む基督教徒のみなり」[8]とする、当時のわが国のキリスト教徒の時勢把握が明らかに蔭を落としていたとみることができよう。増野も、ピューリタン出現の背景に「一国の風俗虚栄浮華に流れ、上王室より下庶民に至るまで、安々逸々奢侈を事とせる」エリザベス朝をおき、「其中真に立ち凛乎たる精神以て邦家の腐敗を清めんとする人士」としてのピューリタン像を力説する。そして「実にマカウレー氏の云へる如く、清教徒は此世界が曾て産出したる最も偉大なる軍隊にして外面より之を見れば甚だ奇怪なりと雖、仔細に之を察すれば人誰か敬すべく慕ふ可きもなるを知らざらんや。其行為世人の笑ふ所となりしにも拘はらず、斯る不人望の位置にありながら一挙して王を制し貴族を倒し教会を振動し須臾の間に英国をして列国交際の間に恐るべき一邦国たる地位に上らしめたるを見れば、吾人は其尋常ならぬ人士の集合たりしを知るなり」[9]として、ピューリタン出現以来の歴史をたどるのである。

その出発点は、エリザベスによる国教会の再建に求められる。「教会を以て国政の治下に置き、全国の宗教を同一にするの条例に基きたる」その政策の目的は「単に国家の安寧を維持せんとするの一事に止まりしが如し」とみた増野は、それに対抗するものとして、メアリ治世の亡命者中、ことにトマス・カートライトの帰国とケムブリッジ大学教授就任を重視し、かれの新説は、第一に「古来教会に行はれ来れる所のものにして苟も儀式の臭味を帯たる者は総て之を擯斥して遺す所な」き「儀文廃毀説」であったが、それは「女王及其下にある人々に対して格

別なる感動をも与ふるに足らざりしが、其一歩を進めて国家を以て教会の治下に置かんとする、教権政治の方策を提出するに及び、始めて大に女王以下を驚かすに至れり」[10]と解釈して、以下に展開される国王とピューリタンの対抗の争点が、教会統治の問題に求められることを示唆している。カートライトの新説の第二は、「教会の長老が専制権を有する」点に求められる。しかしながら著者の長老教会主義に対する評価は「抑此説たる皮相より之を見れば一種の新説に似たれども、其帰着する所は亦一の旧教的教権説に外ならず」とし、あるいは「抑も『プレスビテリアン』風の教会政治は、当時に在ては教師の中にさへ之を知るもの甚だ尠かりし」[11]とする点に明らかなように、先に著者の教派上の立場を推測する材料として引用した「ブラオン派」「コングレゲーション」に比較すれば、はるかに低いといわざるをえない。もっともエリザベス朝における長老教会主義者と分離派の協同と対抗の複雑なからみ合いは、今日の学界においてさえ好箇の研究テーマとなっているほどであるから、[12]増野の認識が曖昧であることは、いちがいに責めるには値しないであろう。

カートライトの新説に対する「フーカーの反駁」（『教会政治』による）、一五八三年の「宗教調査所」の設置とその濫用によるピューリタン運動に対する弾圧・迫害を述べた増野は、じつにかかる迫害が、少数に過ぎなかったカートライトをリーダーとする長老教会主義者と、「唯古風なる儀式を改革し、迷信なる風俗を改め、白衣を着洗礼に十字架の手様をなし婚姻に指環を用い晩餐に跪くが如き諸の虚礼を破らんとするの希望」をいだいた「多数の」「教師及び俗信徒」の、「二つの運動を駆逐して一個の勢力とならしめ」「合同以て其主義を拡張せんとするの勢全英国到る所に生じたり」とするが、それにもかかわらず、前述のように、「後日の清教徒」は「分裂教徒」たる「ブラオン派」に求められるのである。このように第一章「清教徒の起因」にみられるピューリタニズムの定義の曖昧さとそれを原因にするピューリタンの陣営構成についての著者の把握の不明確さがこれら後の叙述に無視することのできない歪みを与えることになる。

このようにエリザベス時代におけるピューリタンの出現を説明した著者は、その末尾において、「豈計らんや鎮圧の反動は突然として国会の議場に現出し、終に一大争乱を社会政治宗教の上の惹起（ママ）するに及びたり」と述べ、第二章以下の叙述に接続させる。「ゼームス王と清教徒、其上、其下」と題された第二章、第三章においては、叙述はいちぢるしく政治史への傾斜を深め、そこではかの「悪虐不道ノ君王」対「自由ヲ唱ヘル議会」というこの段階のイギリス革命観としていわば定型化していた対立パターンが前面に強く打ち出され、ピューリタンの行動は

後者に包摂されて処理されることになる。たとえば、ジェームズ一世の「帝王神権説」に対する反対は「未だ清教徒を立たしむるに足ら」ず、むしろ「温順此の如きの清教徒を駆りて焔の如く熱からしめ獅子の如く猛からしめ、奮然として一度劍を脱くや再び鞘に納めざる如きの勢を顕はさしむるに至りたる者は、即ち王の主張せる第二説監督神権説なり」[14]とし、また一六〇四年の議会における国王に対する反対が、「不法なる租税より一転して不法なる教権の改革に及ぼし、王の要求する金額の徴収を承諾するに先て教権に関する一切の事も亦国会の同意を得べく宗教裁判所の如き宜しく憲法の下に働かしめ、放逐せられたる教師には再び説教の自由を許さるべしと請求せり」[15]と把握するなど、憲政上の対立の争点に宗教問題の占める比重が大きいことを認識しているにもかかわらず、著者は一六一四年の選挙に際しては「何れの選挙区に於ても力の及ぶ限り王権党の候補者を卻け、民権党中名望ある士を撰びたり」[16]として、「王権」対「民権」の対立、後者による「英国の自由の勝利」を強調するのである。そのため、第四章においてはチャールズ一世に対する抵抗の代表者として「ソルジョンエリオット」が選びだされ、しかもその抵抗の目標は「英国の自由の為最も必要なるわ、帝王の内閣が国会に対して責任を有すると否とにあり」[17]として、そのバッキンガム公に対する倫理的批判の姿勢が強調される。さらに第五章において、「英国清教徒の中に於ても、正義自由の保護者、報国愛民の志士」として、章のタイトルに掲げられるのは「ジョン、ハンプテン」である。しかもこの章において中心におかれているのは「権利請願」であって、ハンプデンが主役を演じた周知の船舶税をめぐる闘争ではない。そしてその抵抗の姿勢には「古昔より育ち来れる自由を保護せざるべからず」とする先例と慣習に基く既得権擁護のそれである認識があるにもかかわらず、エドワード・クックを先頭にするコモン・ロー法律家の存在と役割りは矮小化されてしまっているのである。[18]

議会の解散、チャールズの専制政治の時期の叙述にさしかかった著者は、そこに第六章「新世界移住」を挿入し、前代からの新大陸への探険・植民史をたどり、「ブラオン派の独立教徒」による「芳名史上に馥郁たる彼の『メイフロワー号』の航海」を述べ、ついで専制支配下において、ジョン・ウインスロープらによる奨励をうけてピューリタンの移住が増加したことを強調する。本書においてピューリタンを構成する社会層についての指摘があるのは、わずかにこの個所においてである。「此人々は最初南方に移住したる人民とは大に類を異にし、本国にありて破産したる者、国法を犯したる者投機者若くは貧民の輩にあらず、多くの適当の職業を有する中等民族にして、中には大地主訟師学士の

如き人々も少なからず、……其他はリンコルンシャイル及び英国東方諸州の敬虔の念深き誠実なる農業家なり」[19]というのが、それである。そしてかかる社会層の移住の目的が、現世的な利害ではなく「只神を敬ひ信仰の自由を得んとの至聖至高なる赤心より出でしに外ならず」とされ、「彼等が此荒漠なる原野の茅屋にあり、辛苦艱難の中に注ぎたる一掬の紅涙は凝て米国文明の種子となるに至りしなり」[20]と把握されるのである。

専制支配の中心人物、「カンタルバリーの大監督」「ラウド」のピューリタン弾圧政策は、「清教徒の……尤も厭ふべき服制儀式」の強制、「清教徒の為に便利なる講義所」の閉鎖、「地方紳士が法教師を家に雇ひ置くの自由」の剝奪、「セ子バ聖書」の禁止、跪座の強制、日曜日厳守の否定、「遊戯録」朗読強制、その結果としての「数百の教師忽ちにして或は言論の自由を停止せられ、或は其職位を奪はるるの迫害」が、縷々として述べられている。[21]このようにして醸成されてきた対抗関係の帰結として、「ラウドの政略たる今日迄前代の諸監督が執り来りたる保守主義にはあらずして、旧来の性質を一変する改革主義とはなりしなり、是を以て彼の清教徒は却て英国教会の旧質を保存する、保守主義の地位に立つに至りしは亦一奇と云はざる可らず」[22]というパラドクシカルな情勢の指摘があるのは、この段階のイギリス革命観としては注目すべきであろう。

「チャーレス王の虐政」と題された、第七章、第八章は、「監督の乱」に至る時期を対象としたものであるが、ふたたび著者の叙述は政治史への傾斜を深める。注目すべきは、「チャーレス王は始より全然旧来の組織を一変して専政を行はんと欲せしにあらず」、「彼が国会に反対を試みたるは、只平和と経済との為めにして、其希ふ平和を全ふせん為には如何に大なる犠牲をなすも、敢て惜むに足らずとせしなり」[23]など、チャールズの専制の意図に対しては同情を寄せている点と、それにひきかえ「奸悪」なる「ウエントウオルス」および「私欲を達せんと企つる」「ラウド」に「虐政」の責任を帰している点である。[24]またロードの国教会主義のスコットランドへの導入の説明にあたって、スコットランドにおける長老教会の沿革を述べ、「此制度たるや教会の主権をして教師の手に帰せしむるものから、勢宗教上専制に陥るの外観なれども、実際に於ては蘇国の教会程自治の行はるる教制は他に比を見る少く、且其人民一般に与ふるに自治の気象を以てせしは、其設立以後蘇国の史上に顕はれたる種々の変化に徴して明かなり」[25]と評価して、そこからスコットランドにおける抵抗組織の形成と「忍耐も正に其極点に

達した」イングランド国民との共同戦線の結成を説明している。

一六四〇年の「無期議会」（長期議会）における改革を主題にした第九章は、「民間党の領」たるジョン・ピムを章名に掲げている。そしてピムをもって「憲法上の比例と称せらるる一の政理」の発見者とし、「憲法の原理に於て国会の価値王室より重く、又国会中にありて下院の地位は上院に比して枢要なるを認め」[26]たものとして、イギリス政治史上の高い評価を与えている。「英国古代の国憲を恢復するの目的に向かう、長期議会当初六ヵ月間の改革の進展をうけて、叙述は議会内の分裂（「下院内二個の党派を生ず」）に移るが、著者のその説明によると「其一は王家に向って苛酷の処置をせざらんと欲する温和党にして、ファルクランド侯及び……ハイド之を率ゐ、他の一方は則ち清教徒にして、ピム之れが首領たり」とされているが、その分裂原因としては、「ピム等の希望する所は、向後裁判官内閣員一切の官吏は国会より撰ばんとするにあり、加之教会の問題に関しても亦両党大に其説を異にする所ありき」[27]と述べられ、宗教問題は副次的な原因として挙げられるに留まり、「根こそぎ請願」などによるピューリタンの動向についてはいっさい触れられていない。以下、アイルランドの反乱、「グランドレモンストランス」「五議員捕縛」という周知の事件の叙述につづいて、第十章で「国内の戦乱」と題する内乱の記述が始まる。

先に議会内の分裂が、「温和党」対「清教徒」と把握されていたにもかかわらず、内乱は「王権党」対「民間党」としてとらえられ、初期の段階における「民間党」の敗北と「民間党中に在て日月と光明を争ふたるハンプテン、ピムの二傑」の死、につづいて、著者はクロムウェルの出現を「上天未だ英国の自由を見捨てず、已に一豪傑の其後を嗣て民間党に首領たるべきものを備へたり」[28]と説く。そしてクロムウェルの「鉄騎」の編成原理については、「戦乱の始めに於て彼既に烏合の衆の以て精練なる王軍の騎兵に当り難きを洞察し、気慨あり節操あり、掠奪の為めに戦はずして自由と宗教の為めに戦ふべき、人士を撰んで隊伍を作りたり、斯る種類の人々なるが故に、各一定の宗教上の意見を有し必しも同一ならざりしと雖クロムェルは其取る所の教説の如何を問はず、苟も神を敬し民を愛するの人にしあれば、喜んで之を容れ以て己のが麾下に属せしめたり」[29]と認識している。しかしながら著者の認識はこれまでであって、ウェストミンスター宗教会議を契機として顕在化してくる「長老派」と「独立派」の対抗の視点は全く欠落しており、「新式兵」の結成についてもこの視角からの説明はなく、また軍隊内に定着したピューリタン・セクツの雰囲気についても顧慮は払われてはいない。王の降伏からスコットランド征服に至る、ピューリタン革

命のクライマックスは、「民主政府」と題する第十一章で取り扱われているが、共和制の性格、またクロムウェルの思想と行動を評価する際の不可欠の指標ともいうべき、アイルランド侵略についても、「ヅロヘダ」「レグスフオルド」の「二大殺戮は実にクロムェルの記臆(ママ)中、永く存したる一汚点なりし」[30]とするに留まっている。

さて最後の章は「オリバル、クロムェル」である。長期議会の武力解散、「神聖議院」の改革の失敗をみた著者は、ここで重大なひとつの誤解を犯している。それは護国卿政権の成立をめぐる誤解である。「委員会に相謀て新憲法を制定し、クロムェルを奉戴して摂政の政に即かしめたり、さればチャーレス王の死後未だ五カ年を出でざるに、英国は復び一の君主国となれり、何となれば摂政の権限最初は幾分か制限せらるる所ありしと雖、其実は一つの国君たればなり」[31]という理解がそれである。それではクロムウェルの業績はどのような評価をうけているであろうか。護国卿政権第一回議会の開かれるまで「其治蹟の見るべき者少からず、外ホルランドと和を講じ、デンマーク、スウイーデン、ボルチュガル等諸国と通商の訂約を結び、中教育を励まし学校書籍館を設け宗教各派に与ふるに礼拝の自由を以てし、法庭(ママ)の悪弊を矯め、租税を軽くし以て下民の苦楚を減し、又蘇格蘭と同盟の約を結びたるが如き其重なるものなりき」[32]とされ、ついで第二議会解散後の「全く独断の政」については、「此時やクロムェルの権威は其頂上に達し、……ジャマイカをスペーンより奪ひて英国の属地となし、西印度に於ける英領の基礎を作り、又仏蘭西と合して……スペーンの軍を敗り、声名を四方に轟かせり、之よりして欧州諸国もクロムェルに対する王に対するが如く、全権使節を派遣し条約を結ぶに至れり、クロムェルの在位中国内に秩序と平和を来たし、商業を励まし殖産を盛にしたる等其功蹟尠からず」[33]とされている点に、その評価がうかがわれるであろう。

最初に記したように、本書は著者の信仰の原点確認の書であるべきはずであった。しかしながら意外なことに、「ピューリタンの英雄」たるべきクロムウェルは、必ずしもそれにふさわしい取り扱いはうけていない。たとえばかれの性格については、わずかにつぎのような叙述が眼を惹くにすぎない。「クロムェル人と為り自ら修むる甚だ厳に其一挙一動旧約の律法に依て之を支配し、身白宮(ホワイトホール)に住するに至ると雖、衣食生活質素を事とし、一たび死するや家に余財を止めず、而して進んで国事に当るや一身を抛棄して毫も顧みる所なく、能く赤手を振ふて全英国を提げ、其地位を低きより高きに昇らしめたるが如き、実に欽慕すべき偉業なりと云はざるを得ず」[34]。これは後に見る内村鑑三の描いた

クロムウェル像とは若干の共通点があるとはいえ、やや距離をおいた把握といえようし、したがって本書からは、木下尚江をとらえた「霊熱に酔ふ」感激も期待できない、とみるべきであろう。著者はイギリスにおけるピューリタンの出現を「一大変動」として把握しようとしていた。それではクロムウェルの没後「王政の回復」までたどった著者は、その「一大変動」をどのようにしめくくろうとするのであろうか。本書の末尾を引用してみよう。

「斯の如く十六世紀の末エリザベス女皇の治下に其源泉を発し、ジェームス、チャーレス二王の代を通じて、英国の社会に一大変化を来たし、大は政治宗教の事より小は万民日常の行為に至る迄、悉く其主義の下に支配したる清教徒も、其最後の代表者たるクロムェル一たび死し、民主政府一たび斃るゝと共に、其迹を社会の表面に絶ち、之に代るにエリザベス時代の浮華淫逸の風は、王政の復古と共に復古し来り、上王室より下庶民に至る迄、復び腐敗の空気中に生活せる頗る慨歎すべき時勢となりたれども、些細に之を察すれば、其れ啻社会の表面に痕迹を絶ちしのみ其正気の存する所、或は解隊後身を百般の職業に委ねて、所在の町村に散居せる鉄騎騎士の清行となって、永く光明を暗黒の中に放ち、英国今日の社会を生出するの種子となり、或はミルトンの詩となり、ボンヤンの書となりて千載の下に不朽の記念を存するのみならず、大洋の彼岸に於て自由と道徳との隆盛を以て宇内に誇る、北米合衆国は是れ則ち清教正気の凝結体にあらずして何ぞや、豈啻に之のみならん、天地の尽きざる限り人類の存せん限り、到る所社会の清化を以て自ら任じ、虚栄浮華の風を避けて謹厳清節の徳を養ひ、半夜風死し草眠るの時、独り寝室の一隅に跪して爾国の来らん事を泣祈するの士は、是れ皆当代の清教徒其人なり、誰か云ふ清教徒は十七世紀の末葉に消滅せりと、今日の日本豈亦明治の清教徒なる者無からんや」(35)。

以上増野の主張を知るために、やや詳しい引用をしてきたが、ここでこの書に対する総体的な評価を試みねばならない。まず第一に注目せねばならないのは、本書には「革命」という用語は用いられておらず、したがってピューリタンの出現による「一大変動」をピューリタン革命として把握する視角が欠除していることであろう。そのうえ「虐政」に対する「国会」の抵抗に宗教問題がかなりの比重を占めているとの認識があるとはいえ、ピューリタニズムについての神学的認識はかなり曖昧であり、長老派・独立派・セクツの対抗という革命陣営の組織原理としての認識もみられない。もうひとつ決定的なことは、本書に登場する「清教徒」の焦点が定まっていないため、共感をひきおこすどころか、読後の印象は意外なほど稀薄である。こうみてくると、本書の翌年に刊行された竹越与三郎の『格朗空』との間の距離は、じつに大きいといわねばならない。ところで竹越の「引用書目」の冒頭には、Carlyle's *Letters and Speeches of Oliver Cromwell* が挙げられていた。増野の著書には、カーライルの痕跡を認めることはできない。前稿でも記したように、このカーライルの存在は、明治二十年代以降のわが国におけるピューリタニズム観、ひいてはイギリス革命観の構築に有力な材料を提供するものであった。ここで節を代えて、わが国におけ

るカーライルの受容についてみることにしたい。

(1) 増野悦興『英国清教徒紀事』序、四ページ。なお増野の経歴については、同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』昭和四十年、みすず書房によっても確認することができなかった。

(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)、(11)、増野、前掲書、二〇～一、一、序および三、一～二、二四および九二、四、序および三～四、七～八、一三～四、一五および二〇ページ。

(12) わが国における研究としては、松浦高嶺「エリザベス朝の長老派主義と分離主義」『史苑』十九巻、二号、昭和三十三年、および大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』、第一部、昭和四十一年、新教出版社などを参照。また海外におけるピューリタニズム研究の現段階は、松浦高嶺「ピューリタニズムにかんする最近の諸解釈」、『史苑』二十七巻、一号、昭和四十一年、に簡潔に要約されている。

(13)、(14)、(15)、(16)、(17)、増野、前掲書、二〇～二四、三四、四〇～四一、四一、六二ページ。

(18) たとえば、「権利請願」提出の際の議会内の分裂にふれた増野は、バッキンガム公罷免を要求する側に、エリオットとピムをおき、「コーク」をむしろ国王擁護の側に位置させている（同右、七六ページ）。

(19)、(20)、(21)、(22)、(23)、(24)、(25)、(26)、(27)、(28)、(29)、(30)、(31)、(32)、(33)、(34)、(35)、同右、八九、九〇、九一、九六～七、一〇〇～一、一〇六以下、一一四、一三一、一三七～八、一四八、一四九、一六〇、一七〇、一七〇～一、一七四、一七六、一七八～一八〇ページ。

(二)

明治三十三（一九〇〇）年イギリスに留学した夏目漱石は、そのロンドン滞在中、チェルシーにあるカーライル博物館を四度も訪れ、その所蔵するカーライルの蔵書計三二九冊の書名をわざわざ書き写した「カーライル蔵書目録」を『学燈』に掲載し（明治三十八（一九〇五）年二月）、さらに珠玉の名編として知られる「カーライル博物館」も同誌に発表した（明治四十一（一九〇八）一月）[1]。カーライルの名前は、明治三（一八七〇）年に刊行された、中村正直の『西国立志編』の中に、『フランス革命史』草稿の焼失事件をめぐるエピソードが登場しているゆえ、イギリスの文人としては比較的早くその名前も知られていたと考えられるが、それにしても漱石のかれに対する敬愛をその後育んだものはいったい何であったろうか。わが国におけるカーライルの紹介と受容の過程に眼を転じよう。

前稿でも触れたように、自由民権運動のイデオローグ植木枝盛に大きな影響を与えた坂本南海男の蔵書には、カーライルの『クロムウェル

の書簡と演説』があったといわれているが、カーライルの紹介は明治二十年代に入って本格化してくる。おそらくもっとも早くカーライル紹介の筆をとったのは、富士見町教会を日本プロテスタントの有数の教会に発展させた植村正久であろう。(補註1) かれは明治二十三年（一八九〇年）――前節でみた『英国清教徒紀事』の刊行された翌年であり、竹越の『格朗空』の刊行された年であることに留意――、この年自らが創刊した『日本評論』誌上で二度にわたってカーライルを論じた。(2) その末尾につぎのような一節がある。「余の英京ロンドンに在るや、暫くチェルシーに寓居せり。居るところチェイニ・ロウに近きをもってしばしばカーライルの旧居を過ぐ。テムズ河を距ること遠からず、道路の両辺老樹茂れる所に、赤煉瓦の家あり。粗造にして、有名なるカーライルが住居せし所とも見えず。その平生の質素想うべきなり。彼が労働の神聖なるを唱え、節倹の福音を説き、自ら平民の一人として、正直に、勤勉に、また高貴に、その誉れある生命を送り、一千八百八十一年二月五日の朝溘焉として世を逝りたるは、すなわちこの家にてありき」。植村のロンドン滞在は明治二十一（一八八八）年のことであるが、極言すればロンドンにおける漱石のカーライル体験の原型がここに認められるであろう。しかしながらこの評論は、華美に流れ、功利を重んずる時勢に対する悲憤慷慨の警醒の思想家としてのカーライルの紹介であって、ことに後半においてはかれの「民政（デモクラシー）」批判に力点がおかれている。そのうえ植村は、カーライルの英雄崇拝に対しては、「平素勢力を崇拝するに過ぎ、これをもって殆ど天理と同視したるによらずんばあらず」として、批判的である。この点からみて、植村の場合には、カーライルを通してのピューリタニズムないしはピューリタン革命への認識は、前面には押しだされていないのであって、われわれの期待は裏切られるといわねばならない。

さてわが国における本格的なカーライルの紹介は、明治二十六（一八九三）年に出た。平田久(補註2)『カーライル』（四六判、二〇九ページ）がそれであり、同年民友社が刊行を開始した『拾式文豪』叢書の第一巻を飾るものであった。世界の十二文豪の第一巻にカーライルが選ばれ、第二巻が竹越与三郎の『マコウレー』であるところに、当時のイギリス文学に対する関心のありかと評価がうかがえて、興味深い。(3)

本書は、その前半までの六章でカーライルの生涯を描き、つぎの三章を業績の評価にあて、最後の二章でその死と影響について論じている。初期の「傑作」『仏国革命史』を論じた個所で、著者はカーライルの特徴をつぎの点に見出している。「カーライルの特質は其の一身に、或る意味に於て予言者と技術者との二つを兼ね、時としては前者主となり、時としては後者主となり、而も決して一の為めに他を忘れざるにあ

り。而して彼は今此の二つの性情に最も適せる題目を撰び、其の全力を之が為めに揮ひ、多くの障礙を通じて刻苦せり」[4]。そして著者はこのスコットランド生まれの「容儀粗野なる天才」が、ロンドンにおいて当代を代表する思想家として歓迎をうけるに至る次第をたどるのであるが、その間にあって、のちにエメリ・ネフの名著で結実する、ヴィクトリア朝を代表する二人の思想家、カーライルとJ・S・ミルの間に取り結ばれた共感と離反というテーマについても[5]、多くのページをさいている。

それでは、問題の『クロムウェルの書簡と演説』*Letters and Speeches of Oliver Cromwell*, 1845についての本書の紹介をみることにしよう。著者は、カーライルの『チャーティズム』*Chartism*, 1839（平田によれば『券状党論』）に「力是則正」という認識が初めて明白に現われているとの理由で、「旧年……の急進主義より晩年の保守主義に変ずる」[6]境界線に立ったとみているが、『過去と現在』*Past and Present*, 1843において「所謂放任主義」に対する攻撃の烈しさを加え、ここでミルと離反し、「『過去及び現在』の先駆あって、強硬なる政府を賛称せる『クロムウェル伝』出でたり」[7]と把握している。周知のように『英雄および英雄崇拝』*Heroes and Hero-Worship*, 1841は、その第六「帝王としての英雄」としてナポレオンとならんでクロムウェルを取り挙げていたのであったが、それとの関連が触れられていないことは、のちにみるような「英雄論」分析の曖昧さを生んだ原因として、注目に値いすると思われる。さて一八四二年にカーライルが試みたピューリタン革命の古戦場の渉猟（イリー、ウースター、ダンバーなど）に触れた著者は、この書の成立に至る四年間のカーライルの「呻吟、苦痛」を強調する。そして「『クロムウェル伝』は千八百四十五年に出版せられ、日ならずして初版、再版、三版を売り尽し、当時第一流の創作的歴史家として著者の名を四方に伝播せり。二百年前革命によってチャールス王朝を顚覆したるクロムウェルは、二百年の後再たび蘇り出でて、人物判定の標準を革命し歴史の専制を転覆して其業を全ふしぬ」[8]とされる。他に本書において直接この書について触れているのは、つぎの個所である。「『クロムウェル伝』が従来の定論を顚覆して、オリバーは偽善者にあらず虚偽者にあらず、真理の人たることを明らかにし、百年の寃魂を慰めたるは既に人の熟知する所ろ也。此の書はまた著者か如何に真実を貴ひたる乎を示すに足る、クロムウェルは己れの口を以て己れを語りたり」[9]。この二個所の引用から明らかなように、著者は『クロムウェル伝』の成功を、クロムウェルを覆っていた二世紀にわたる偽善者という誹謗を取り除いた「人物判定の標準の革命」に見出しているのであって、予想されるような「ピューリタンの英雄

クロムウェル」像の強調はみられないのである。

「十九世紀前半においてイギリスの著述家のなかで、マコーリーを除いては、カーライルほどの刺激を歴史研究に与えた人はなかった。かのイングランドのウィッグ党員が歴史を自分の政治的信条の正当化のために用いたのに対して、このスコットランドのカルヴィニストはそれを自分の倫理的教義の立証に用いた」[10]とは、G・P・グーチの評価であるが、平田の『カーライル』においても、「交友というよりも寧ろ競争者」であったマコーリーとの対抗が説かれ、その歴史観の説明にあたっても、マコーリーとの対比の視点がとられている。

「彼（カーライル）が歴史に対する観念はマコレーと其の種を同ふせり。二人の歴史家は共に、宮廷及び陣営の記録を以て歴史と称する説を打破せり、彼等は共に、転変起伏する外界の現象の下には国民的感情の流るゝあるを見たり、而して総ての現象の源因、文明の法則、人民の貧富強弱のよりて来る所ろを此の国民的感情に求めたり。されど二人は甚しく隔離せり、一は大平原を流るゝアマゾンの堂々粛々として進むが如く、一は動かざる山の如く、他は熾なる火の如く、其躰に於て異なるのみならず、其情に於ても亦異なれり。マコレーは己れの政治主義を説明せんが為に描けり、カーライルは其の描きたるものをして云ふがまゝに云ひ、語るがまゝに語らしむ。かくマコレーは伝記を拡めて歴史となし、カーライルは歴史を縮めて伝記となせり、かくマコレーに於ては最も流麗なる話説を聞き、カーライルに於ては最も精彩ある実景を見る」[11]。（　）内引用者）

先に引用したG・P・グーチは、カーライルの宗教的立場を、「スコットランドのカルヴィニスト」と規定していた。平田はそれをどう把握していたのであろうか。第八章は、「根本的の問題――宗教信仰の講壇に於て彼が何事を説教せしか」「彼の宗教は何物なりしか」を問うことを目的にしている。平田は、「総てのものの中に宗教を見た」カーライルが、信仰においては、非唯物論、非無神論、非科学、非懐疑派であり、しかも「加特力教たると、プロテスタント教たると、儀式的なると自由的なるとに論なく」「正統派と呼ばれたる総ての信仰を否定」する立場をとるものであったと把握し、根本においては「情の宗教」であったとする。[12]したがって「カーライルは時としてピュリタン精神の絶頂に上り、弾劾者となって叱する」こともあれば、「また時にヲルヅヲルスの『不死の歌』に並ぶべき高調を以て訴ふる」汎神教徒としての姿勢をも呈する、「撞着矛盾」を示すことになると理解する。[13]この場合、ピュリタンが必ずしも教派的立場としては把握されていないことが注目されねばならない。「彼は『基督教なきカルビン派』と云はれたり、彼は『信条を失ひたるピュリタン』なりと云はれたり。彼は死するまでピュリタンにてありたりき」[14]という指摘の前提にあるのが、それである。それゆえに、平田のこの著者においては、カーライルの

クロムウェルに対する関心は、つぎのように間接的に説明されるに留めるのである。

「カーライルは歴史に一貫の真理あるを見たり、歴史の中に神を見たり、彼は固く不正を制する正義の使命を信じ、善と悪とは全然反対に立って止むなき戦をなすを信じたり、此の信仰は彼とピュリタンとを繋ぐの金鎖となり、彼をして数々ピュリタンの再たび起たざるを痛感せしめたり」。(15)

カーライルが『クロムウェルの書簡と演説』の執筆に着手した背後には、一種の危機意識が強く働いていた。『現代の諸徴候』*Signs of the Times*, 1829 に始まり、『チャーティズム』*Chartism*, 1839 を経て、『過去と現在』*Past and Present*, 1843 で深められたかれの時代認識は、「機械の時代」のもたらした弊害の是正に何らの意欲を示さない支配社会層（captains of industry）への失望に触発されて、「英雄的・敬虔的・哲学的・道徳的時代」の復活、「『一人立つ強者』、指導者、ヴィジョンに魅入られ傾聴せられ崇敬せられ服従さるべき指導者、という英雄像の創造」(16)にかれを駆りたてたのであった。換言すれば、『過去と現在』の冒頭に明示された「イギリスの状態という問題（Condition-of-England question）から生まれた『英雄崇拝論』の、より詳細な実証の記録こそ、『クロムウェルの書簡と演説』に他ならなかった。したがってカーライルは、クロムウェルの行動のすべてを、ドロエダの虐殺も、長期議会の解散も、すべて是認し、結果においてその「武断政治」を肯定したのであった。

平田の『カーライル』には、このような認識はまったくみられない。「彼は英雄崇拝者にてありき、彼か重んぜし所は外面の形体にあらずして、内面の精神なりき」(17)という指摘に留るのをみれば、この書物の限界は明らかであろう。民友社が『拾式文豪』の第一巻に『カーライル』を刊行したところに、前にも述べたように、カーライルへ寄せた当時の関心の高さがうかがえるし、また本書がさらに関心をかきたてることに何らかの寄与をしたことは推測できるにしても、本書が直接クロムウェルおよびピューリタニズムへの関心をいっそう高めたとは考えられない。これが本書の内容を分析した一応の結論である。

(1) 「カーライル蔵書目録」（岩波版『漱石全集』十六巻、昭和四十二年、二七五～二九七ページ）、「カーライル博物館」（同上、第二巻、昭和四十一年、三三～四三ページ）。また漱石自身の蔵書には、かなりの数のカーライルの著作があり、その代表作をほぼ網羅しているが、本稿の対象たる『クロムウェルの書簡と演説』は含まれていないことが興味をひく。なお漱石とカーライルの関係については、さしあたり矢本貞幹『夏目漱石――

その英文学的側面』、昭和四十六年、一四八～一五〇、一七二～三ページを参照。

(2) 植村正久「トマス・カーライル」、『日本評論』十、十一号、(『植村正久著作集』、第三巻、二〇六～二一八ページ)。

(3) 『拾式文豪』叢書全十二巻の中に、英文学関係で入っているのは、『カーライル』『マコウレー』の他は、宮崎八百吉(湖処子)の『ヲルヅヲルス』だけである。他に号外として明治二十七(一八九四)年に内田魯庵の『ジョンソン』が刊行された。ちなみに『拾式文豪』中、外国文学者は上掲の三人の他は、『ゲーテ』、『エマルソン』、『トルストイ』、『ユーゴー』の四人である。ここで当然、民友社を率いた徳富蘇峰に対するカーライル、マコーリー両者の影響について考察せねばならないはずであるが、今回はその余裕がなかった。他日を期したい。

(4) 平田久『カーライル』四十六ページ。

(5) Neff, Emery, *Carlyle and Mill—An Introduction to Victorian Thought*, 2nd ed. 1926. (エメリ・ネフ、石上良平訳『カーライルとミル、ヴィクトリア朝思想研究序説』、未来社、昭和四十三年)

(6)、(7)、(8)、(9)、『カーライル』、五七、六四、六六～七、一六八ページ。

(10) Gooch, G.P., *History and Historians in the Nineteenth Century*, 2nd, ed., 1952, p.301.

(11)、(12)、(13)、(14)、(15)、『カーライル』、一六三～四、一三八～一四二、一四六～七、一四二、一四四～五ページ。

(16) Williams, Raymond, *Culture and Society* 1780-1950, Penguin ed. 1961, p.90. (ウイリアムズ、若松・長谷川訳『文化と社会』、ミネルヴァ書房、昭和四十三年、七七ページ)。筆者のカーライル理解は最近の秀れたカーライル論である本書(第一部、第四節「トマス・カーライル」)と、古典的名著とされている前掲のネフによるところが大きい。

(17) 『カーライル』、一五八ページ。

(三)

平田はその『カーライル』の末尾において、「高尚なる生活に進まんとするものあらば、早くカーライルに来って、新しき福音の前に道を開かん為め、天より遣られ、今尚ほ野に叫ぶ予言者の声を聞け」[1]と書き記した。ここで、この「野に叫ぶ予言者の声」に耳を傾けたものの中で傑出した存在と考えられる内村鑑三のカーライル理解、ひいてはクロムウェルとピューリタン革命についての見解に眼を転ずることにしよう。

内村鑑三の七十年の生涯に遺した尨大な著作の随処に、「カーライル」、「ピューリタン」、「クロムウェル」の三者は現れている。それは内村のこの三者に対する傾倒がいかに深かったかを、如実に示すものであるが、この三者に対する言及はいくつかのタイプがあり、いって

みれば、それが若干のヴァリエーションを伴いつつも、リフレーンとして表現されている。そこで本稿では、㈠かれのカーライル、ことに『クロムウェルの書簡と演説』のうけとめかた、㈡クロムウェルとピューリタン革命への理解、㈢いわゆる「非戦論」の提出に前二者がいかなる関連を有したか、の三つの問題に焦点を求めて、内村のピューリタニズム観をとりあげることにしたい。キリスト再臨運動を開始し（大正七（一九一八）年）た以降のかれのピューリタニズム観には、若干変貌が認められるが、本稿の対象とする時期からは逸脱しているため、ここではとりあげないことにする。

まず第一の内村のカーライル受容を問題にしよう。周知のように内村は、『後世への最大遺物』において、「私は元来トーマス・カーライルの本を非常に敬読する者であります」と語り、「カーライルの書いた四十冊ばかりの本をみな寄せてみて」とさえいいきっている。[2] さらに「聖書のほかに私の生涯に大刺戟を与えた」二冊の書物のひとつとして、カーライルの『クロンウェル伝』を挙げるのがつねであった。それでは内村がこの書に遭遇したのは、いつのことであったろうか。明治四十二（一九〇九）年に書かれた「読書余録」には、無視することのできない重大な告白がみられる。

「カーライル著『クロンウェル伝』の余に及ぼせし感化については、余はこれを叙するに足るのことばなきを歎ずる。余は英国版五冊物を、麻布飯倉の古本屋橋爪において買い求めた。時は明治の二十三年、余が嘱託教員として東京第一高等学校に雇われた時であった。余はこれを得て、何ものをも忘れて読み続けた。余はこれによって、自由と独立との愛すべく貴むべきを深く教えられた。しかし読んで半ばに至りしころ、余は高等学校の倫理講堂において、そのころ発布せられし教育勅語に向かって礼拝的低頭をなせよと、時の校長代理、理学博士某に命ぜられた。しかるにカーライルとクロンウェルとに心魂を奪われしその当時の余は、いかにしても余の良心の許可を得てこの命令に服従することができなかった。余は彼らの勧めによって断然これを拒んだ。しかしてそれがために余の頭上に落ち来たりし雷電……国賊、不忠……脅嚇と怒喝……その結果として、余の忠実なる妻は病んで死し、余は数年間、余の愛するこの日本国において、まくらする所なきに至った。余の肉体の健康は、それがために永久に毀損せられ、余の愛国心は甚大の打撃をこうむりて、余は再び旧時の熱心をもって余の故国を愛するあたわざるに至った。実に余の全生涯にわたるこの世の不幸はすべてこの一瞬間より来たった。しかし余は今に至り、この事のありしを悲しまない。余は確かに信ずる、余の神が、その時、特に余に命じて『クロンウェル伝』をあがなわしめたまひしを。もしこの伝記とこの伝記が余に起こしこの事件なかりしならば、余の生涯は平々凡々、取るに足りないものであったろう。余は真個の洗礼をこの時に受けたのである。水の洗礼にあらずして火の洗礼を、余はこの時に受けたのである。ただ取り返すあたわざるは余のあわれなる妻である。しかし彼女もまたこれによって、キリストの天国において救われたものであると信ずる。われらは国にそむいてこの事をなしたのではない。良心の声を重んじ、良心にそむくのは国を欺くのであると信じたから、この事をなしたのである。ああカーライルの『クロンウェル伝』よ、なんじは余にとりては火の書である。なんじは余を益せ

しこと深きだけ、それだけ余に殃（わざわ）いしたる書である。余は永久になんじを保存せん。しかして余は余の小なる書斉において、なんじの五冊が列を正しゅうして立つを見て、余の胸は感慨の涙にあふれ、余の思いは高きかの国に及ぶ。キリスト教の聖書を除いて、なんじほど深刻に余を感化した書物はない」。(3)（傍点引用者）

ここにはっきりと語られているように、内村の生涯に決定的な作用を及ぼした、いわゆる「不敬事件」の背後には、カーライルの『クロムウェルの書簡と演説』があったのである。(4) まさにそれゆえに、この書物は彼にとって「生涯に大刺激を与えた本」であったのである。おそらくはホーソンの『伝記物語』を通して国王チャールズ一世の処刑という史実に遭遇した木下尚江の場合と同様、内村のクロムウェルとの遭遇は、ただ個人レヴェルに留らない重要性を、日本の近代思想史に賦与したといえるであろう。それではクロムウェルとの遭遇を媒介したカーライルを、内村はどのようなうけとめかたをしているのであろうか。

カーライルの数多い著作の中で、内村が最高位に位置づけているのは、いうまでもなくこの『クロムウェルの書簡と演説』である。

「カーライルの『クロンウェル伝』は……これ実に彼の著述中最も大なるものなり。『仏国革命史はそのドラマ的修飾において、『フレデリック大王伝』はその歴史的考証において、これにまさるところあらん。されどカーライルの精神はすべて彼の『クロンウェル伝』にこもれりと言わざるべからず。〔中略〕

余は思う、もしカーライルが『クロンウェル伝』をもって彼の著述事業を中止せしならば、彼は益のみを後世に残して害を伝えざりしならんと。彼の『フレデリック伝』はあらずもがな、彼の『末世の冊子』(*Latter-days Pamphlets*, 1850) は彼の公にすべからざりしものならん。彼の『英雄崇拝論』は多くの不健全なる思想を青年に供し、ことにそのわが日本に伝わりてより以来、この書によりて生涯を誤りし青年少なしとせず。これカーライルの不平時代に成りし書にして、これを読んで多少不平病に侵かされざる者なし。

されども『クロンウェル伝』に至っては全くしからず。これカ氏の「愛の著述」なりという。彼をしてこの著をなさしめし動機は彼の母より受けしものなりという。彼女の深き宗教心と強健なる常識とは、この誤解されし偉人において真正のキリスト教的ヒーローを発見せり。しかして彼の幼時において彼女より注入されしこの思想は、この大著述となりて世に現われしなり。カーライルの『クロンウェル伝』は実に一平民が一大平民を弁護せし書なり」。(5)（〔　〕内、引用者）

そして内村はこの書物に対して、右の引用中〔中略〕とした個所において、「彼の崇敬を呈せし人、彼が真誠に崇拝せし人は、オリバー・クロンウェルその人なりし。二百五十年間、大逆無道の臣として英国人の脳裡に存在せしこの人を、恥辱の墓の底より発掘し来たり、彼を英国第一の愛国者として再び世界に紹介せし歴史家カーライルの功は偉大なるかな」という讃辞を呈している。この文章が書かれたときよりも

三年前の明治三十（一八九七）年に初版を出した内村の『愛吟』には、「カーライル著『クロンウェル伝』による」との副題についた絶唱、「ダンバーの戦争」が収められており、[6] この後もしばしばカーライルとクロムウェルを語りつづけるのであるが、右の引用の中では、先に見た平田の『カーライル』では欠落していた、本書の成立の契機に触れている点と、植村とはやや異った角度からではあるが『英雄崇拝論』に対してははなはだ低い評価しか与えていない点が注目されるであろう。この二点についてさらにつっこんだ分析を試みているのが、明治三十一（一八九八）年、内村が基督数青年会館で行なった五回の講演を収録した、『宗教と文学』である。その第一回をかれは「カーライルを学ぶの利と害」[7] と題している。カーライルの「字句の用法、思想の佶屈にして曲直ならざるを明確におのが脳裡に注入」する因難をまず訴えた内村は、[8] ここでも『英雄崇拝論』を「彼が著作中最悪の作」とし、「彼いまだ世に認識されず……生活つねに窮を告げて不平に堪えず……社会に対する満腔の不平を爆発」させたものであり、「彼を学んでたちどころに現われ来たるところの弊害は、不平の念に堪えざらしむるところなり」として、「かくのごとく不平の要素は彼の一生を貫徹したり。ゆえに彼を学ばんと欲するものはこれにかんがみて、よくその不平の気を抑制せざるべからず」という忠告を与えている。これにひきかえ「最も善きところを学ばんと欲」するものに、内村が推薦するのは、『評論集』（*Critical and Miscellaneous Essays*, 1839）と『時代の徴』（*The Signs of the Times*, 1829）であり、さらに『クロンウェル伝』である。

「彼が後年の著作にして、雄渾偉大なる思想を沈痛壮快なる筆に走らせ、読む者をして血、激し、脈おどり、貧夫も廉に懦夫も志を立てしむるものは、あの『クロンウェル伝』なり。こは彼の理想的の政治家を説きたるものにして、稗益多く趣味ゆたかに、読む者の脳裡に長くその印象を刻むに至っては、彼の著書中の随一なりとす。英国の『レヴュー・オブ・レビュース』雑誌の記者、ステッドが愛読し、かつ最もその感化をこうむりたる書は、聖書および カーライルの『クロンウェル伝』ならびにローエルの詩集なりと言えり。余輩また感を同じゅうす。もし心を潜めて『クロンウェル伝』をひもとかば、誰か正に意気昂然として正義の旗を朝風に翻し、堂々鼓を鳴らして人道を無視する腐腸悖徳の政府を転覆するの念禁ずるあたわざるを覚えざる者あらんや。カーライルは絶えて他人を恐れざる人なりき。されど天下に彼の恐るるところの人物ただ一人ありき。これを無学なるその母なりとす。母、幼きころより彼を諭していわく、クロンウェルは世人の言うがごとく決して愚なる者にあらず、英国政治家中最も大なる英雄なりと。彼の『クロンウェル伝』を著わすところ、あに偶然ならんや。しかしてこは彼の思想の最もうるわしく成熟したる時の作にして、その生涯の絶頂に達したるものというべし。[9]」

このようにカーライルの作品を評価した内村は、「カーライルに学ぶの利益」として、「第一に『誠実』の信念なり」として、「クロンウ

ェルを論ずるは、あくまで彼……の誠実なる赤き心を発揮して世に教えんとしたるのみ」と論じ、第二に「労働を尊重すること」をあげ、さらに第三に「貧民を愛すること」をあげて、貧民の味方としてのクロムウェルを強調している。[10] 以上みたようにカーライルに対する熱烈な敬愛を被歴した内村は、またそれにつきまとう誤解とも闘わねばならなかった。たとえば、「不幸なる訳語の中に、カーライルの Hero Worship を英雄崇拝と訳せしがごときはあらざるべし。ヒーローは英雄にあらず、ワーシップは崇拝と訳すべからず……。偉人（Greatman）は道徳的人物なり。釈迦のごとき、ダンテのごとき、ルーテルのごとき、彼らはグレートメンにして、英雄にはあらざりし。……崇拝なる語は、人以上の実在者に対し用うべき語として存すべきものなり。崇拝は屈隷を意味す。献身的服従を意味す。……余輩は人物崇拝を見るに精神的大疾病をもってす。これをして撲滅せずんば、雄志、宏量の吾人の内に起こるあるなし」[11] と論じて、浅薄な「英雄崇拝論」に警告を発している。また内村個人に即しても「日本のカーライル、……小カーライル、……第二のカーライル」という称号をもって呼ばれることに対し、「これ余にとってははなはだ名誉なるがごとくに見えて、実はめいわく千万なりと言わざるべからず……。余はカーライルと宗教を異にし、人生観を異にす。……カーライルの人生観は余の忍ぶあたわざるところ……余はカーライルの弟子にあらず。余の師はほかにあり。されども余はカーライルを尊敬する者の一人なり。……すなわち、その説を賛せずしてその志を敬する者なり」[12]（傍点引用者）と、「弁明」を書かねばならなかった。しかしこの文中にみられる「余はカーライルと宗教を異にし」という発言は、いったい何を意味するのであろうか。内村のクロムウェル観、ひいてはピューリタン観を問題にしなければならない。

「クロンウェルの伝を読みまする時に、私の心に大愉快がございます。クロンウェルは私にとって親密な兄弟であります」[13] と断言してやまない内村は、しばしばクロムウェルの生涯とその意義を説いている。比較的初期に書かれたもので、しかも内村のクロムウェル評価をよく伝えているのは、『キリスト信徒のなぐさめ』（明治二十六（一八九三）年）のつぎの一節であろう。

「……英の無冠王クロンウェルあり。彼もまた権力が精神と相争うのときに生まれ、身を民権自由にゆだね、英国民の全世界に対する天職を認め、十七世紀の初めにあたって、キリストの王国を地上に来たらせんとの大理想を実行せんとせり。百難起こりて彼の進路を妨ぐといえども、彼の確信は毫も動くことなく、ついに不充分ながらも英国を化して公義と平等とに基する共和国となすに至れり。されども英国民はいまだことごとく彼無冠王の大理想を有せず、彼の心霊的の政治は肉欲的の普通社会を喜ばさず、反対ついに四方に起こり、彼はただひとりホワイトホールに天の父のみを友とするに至れり。され

ども彼の理想と信仰とは確乎として動かず、彼は彼の事業の永続すべからざるを知るといえども、なお彼の最初の理想に向かって進み、内乱再起の徴あるをも顧みず、勝算全く絶えしにも関せず、終生、主義を貫徹して死せり。彼が世を去るや、彼の政府は直ちに転覆され、彼のしかばねはあばかれ、彼の名は卑しめられ、彼の事業は一つとして跡をとどめざるがごときに至れり。世はチャーレス第二世の柔弱、淫縦、腐敗の世となり、バトラル、ドライデン、クラレンドンのごとき狐狸の輩、寵遇を受け、人に、ハンプデンもベーンも無冠王もかつて地上の空気を呼吸せしことなきやの感を起こさしめたり。小人はみな言えり、ピューリタンの事業は全く失敗せりと。されども無冠王死して三十年、彼の石碑にいまだ青苔だも生ぜざる時に、スチュアート家は全く跡を絶つに至り、爾来、真理と自由とが地球回転の度数と共に増進するや、無冠王の理想は徐々に実成されつつあり。クロンウェルありしがゆえに、英国は十八世紀の革命なかりしなり。……クロンウェルありしがゆえに、英国民は、他欧州国民に先だつ百年、すでに健全なる憲法的自由を有せり。クロンウェルは実に英国を愛せし人なり」[14]。

内村のクロムウェル像を構築している第一の要素は、いうまでもなく「キリストの王国を地上に来たらせん」として「心霊的の政治」を実行に移した、信仰の人としてのそれである。かの「不敬事件」が起きた明治二十四（一八九一）年の『基督教新聞』には、「清党時代より未来観念を取り去らんには、その最も高尚なりしもの、最も尊敬すべきもの、最も男らしきもの、最も偉大なりしものを取り去るなり。……未来観念を有せざるものとして無冠の大王クロンウェルの生涯を評し見よ、意義なき、目的なき、最も増むべき偽善的生涯なりしを見ん」[15]と書いているし、「クロンウェルより彼のキリスト教を除いてごらんなさい。彼はほとんど無い同然の人であります。キリスト教とクロンウェルの関係は、精神と肉体との関係であります。キリスト教なくして、クロンウェルはありませんでした」[16]とも発言している。それでは内村はクロンウェルの宗教、ピューリタニズムをどのように把握しているのであろうか。明治三十四（一九〇一）年夏期講談会において、かれは「クロンウェルの宗教」[17]を論じている。この講演で内村が意図したのは、「宗教の応用――すなわちキリスト教がいかに応用せられて、いかに大革命が成り立ったか」を伝えることにあり、「願わくはクロンウェルの宗教によってクロンウェルを知れ」というのが訴えの基本である。クロムウェルとグラッドストーンの生活態度における類似を強調した内村は、「彼は実に意外の英雄であった。非常に弱くして、また非常に強い英雄であった」とし、その信仰の核心を「十字架上の贖罪を認め、未来の存在を信じた」点に見出し、「余輩、クロンウェルの勢力を見て神の全知全能を見、神の全知全能を知ってクロンウェルの勢力を解し得る」としている。「クロンウェルはただ神のみ畏るる兵卒を集めた。われわれキリスト信者は大いにこの点においてクロンウェルをまねねばならぬ」のである。この講演を通して「事業の成否は全く信仰の有無

にある」という内村の熱情が伝わってくるのを覚えるが、この点に関連して内村は、クロムウェルがその一員であった「独立派」に対して、独自のコメントを行なっているのを見逃すことはできない。『外国語の研究』（明治三十二（一八九九）年）に見られる解釈がそれである。

「……平民的語類の長なるindependent(独立)なる語に至っては、これまた英人独創の語なり。……そは十七世紀の始めにあたって清党（ピューリタン）なる古今無類の純潔党起こり、信仰の自由とこれに伴う国家の改正を唱えし時、彼らの大主張を言いあらわすに他の言なきをもって、ここに初めて、independent（たよらず）なる新語を鋳造せしなりという。ゆえに清党の一派にしてクロンウェルの率いしものを独立党と言えり。彼らは最も高尚なる最も深淵なる意味において独立を唱えしなり。政治的独立は彼らの第二第三の目的にして、彼らが生命を賭して獲んとせし独立は実に宗教的独立なりし。彼らは他人の干渉なしに直ちに神に近づかんとせしなり。彼らは人一人の真価を認め、その思想を束縛する勢力の、神を除いて他に存すべからざるを主張せり。彼らは実に自由独立をその根原において求めし者にして、後世、彼らの有せし聖志聖望なき者が、単に政治的に他国または他党の羈絆を脱して、もって独立せりと思うがごときは、独立なる高尚なる文字の発見者の決して肯うべからざるところなり」[18]。

ここでもうかがえるように、内村にあってはピューリタンの発生史、すなわちイギリスにおけるカルヴィニズムの受容と国教会の対応、さらにピューリタン内部の陣営構成といった問題についての関心は、見られない。したがってピューリタン革命の内部構造において、革命の推進的イデオロギーであったピューリタニズムの役割りについての理解においても、この「独立党」への言及が明示しているように、「宗教的独立」のみが強調されるのであり、「大革命が成り立った」由縁も、宗教レヴェルの把握に留まるのである[19]。その意味で前稿で引用した、木下尚江の『墓場』（明治四十一（一九〇八）年）の副主人公たる、自由民権家の息子堀口のいう「現われた事業よりも、其の潜んで居た彼の霊熱に酔ふ」というクロムウェル像こそは、まさに内村が描きあげ、情熱をこめて伝えたそれであった。

信仰の人としてのクロムウェル像に重ねて、内村は第二に、「自由の戦士」「自由進歩の師父」としてのかれを力説する[20]。そしてこの「自由の戦士」は、「代議政体または共和政体」の創始者という存在だけではなく、「貴族の敵にして平民の友」でもあり、「貧民を愛する人」でもあった。内村はクロムウェルのこの側面を強調して、「英国がついにクロンウェルを嫌悪するに至りしは、彼クロンウェルがあまりにまじめなる平民なりしがゆえなり。……ゆえに彼らはついに大偽善者として彼を記憶の外に葬り去らんとせり。……されども、少数なりといえどもこの宇宙は平民のものなり。クロンウェルは死後三百年の今日、英国人の理想的政治家となれり。彼の肖像は今は英国国会議場の前に建てられたり。『クロンウェル再び出でよ』とは、今は英国人の声となれり。英国永久の栄光はクロンウェルの理想を実行するにありとは、そ

の多数の政治家の所信となれり」[21]と書いている。問題は、クロムウェルの理想と「英国永久の栄光」が結びつけられている点にある。同じ文章の中にはつぎのような個所もある。「正義によりて進む、大国何か恐るるに足らん。クロンウェル時代の英国は欧州第三等国にのぼらざりし。……されどもクロンウェルその主権を握りてより、英国は一躍して欧州大強国の一として数えらるるに至れり。意志と信仰とに富める一偉人の勢力もまた大ならずや」。同趣旨の発言を他に二つ収録しておこう。

「クロンウェルは実に今日の英国を造るにおいて最も完全なる政治家なりしなり。英国海軍の基礎を定めし者は彼なり。英国属領地の端緒を開きし者は彼なり」[22]。

「かのオリバー・クロンウェルという人の事業は、彼が政権を握ったのがわずか五年でありましたけれども、彼の事業は彼の死と共に全く終わってしまったように見えますけれども、ソウではない。クロンウェルの事業は今日のイギリスを作りつつあるのです。しかのみならず、英国がクロンウェルの理想に達するにはまだズット未来にあることだろうと思います。彼は後世に英国というものを遺した。アングロサクソン民族がオーストラリアを従え、南アメリカに権力を得て南北アメリカを支配するようになったのも、彼の遺績と言わなければなりませぬ」[23]。（傍点引用者）

共和政体のアメリカへの継承を説き、かつクロムウェルの外交政策をイギリス植民地帝国建設の原点として肯定的に評価するのは、「ホイッグ史観」の特徴であり、わが国における著述としては、竹越与三郎の『格朗空』もこのような把握から免れることはできなかった。内村においても、イギリスとピューリタン革命とクロムウェルに対する評価は、大英帝国繁栄の原因究明という視角に制約されており、そのため植民地支配が肯定されているのである。しかしながら、最後の引用は、明治三十（一八九七）年に公刊された『後世への最大遺物』の一節であるが、それから六年たった明治三十六（一九〇三）年、内村は日露の開戦に反対し、非戦論を唱え、「万朝報」が開戦論に立つや、堺利彦、幸徳秋水と相携えて同社を退社した。ところで十年前の日清戦争に際してかれは、日本の「天職」に論拠を求めて「義戦」論を展開していた[24]。「義戦」論から「非戦」論への転向に際して、ピューリタン革命とクロムウェルはかれにどう働きかけているのであろうか。第三の、最後の問題をとりあげねばならない。

まず「余が非戦論者となりし由来」を聞くことにしよう。

「私もついこのごろまで、戦争の悪いということがどうしてもわからず、キリスト教を信じて以来ここに二十三、四年わたりしも、私も可戦論者の一人

でありました。……ヨセばよろしいのに、私は私の廻らぬ鉄筆をふるいまして、「日清戦争の義」を草して、これを世に公にした次第であります。カーライルの『クロンウェル伝』を聖書に次ぐの書と見なしました私は、正義はこの世においては剣をもって決行すべきものであるとのみ思いました。しかるに近ごろに至りまして、戦争に関する私の考えは全く一変いたしました」。[25]（傍点引用者）

ところで転向以前の、内村が主張した「義戦論」の背後には、かれのクロムウェルへの敬慕と深く関連しあう、つぎのようなアメリカ・イギリス両国に対する認識があったことを見逃すことはできない。

「この重大なる関係を有する戦争において、何びとか人類の友をもって任ずるものにして日本の味方たらざるものあらんや。北米合衆国をしてこの衝突に関するその去就を決せしめよ。……その清党祖先の精神、そのリンカン、サムナーら、その数知れざる勇者の霊は、異口同音、こぞって日本主義を賛せんのみ。英国をして同一問題を決せしめよ、その自由の率先者なるモントフォート公サイモンを始め、そのハンプデン、クロンウェル、その清党時代の聖人、そのウィルバフォス、コブデン、ブライト、自由と正義を愛せしそのすべての高潔の士はみなことごとく日本の味方たらんのみ」。[26]（傍点引用者）

内村にとっての日清戦争は、文明の非文明に対する「義戦」であるべきものであり、文明を構成する中核たる「清党祖先の精神」と「清党時代の聖人」もこの「義戦」を支持するはずであった。しかし戦争はかれのこの期待を裏切り、アジア民族に対する帝国主義的侵略戦争としての容貌を呈する。前に引用した「余が非戦者となりし由来」はそれを「私をして非戦論者とならしめし第三の動力は、過去十年間の世界歴史であります。日清戦争の結果は、私にツクヅクと、戦争の害あって利のないことを教えました。その目的たる朝鮮の独立はかえって危くせられ、戦勝国たる日本の道徳は非常に腐敗し、敵国を征服し得しも、故古河市兵衛氏のごとき国内の荒乱者は少しもこれを制御することができずなりました。これは私が私の生国なる日本において見た戦争（しかも戦勝）の結果であります」[27]と説明している。しかしながら、前述したように同じように「万朝報」を去ったとはいえ、内村の立場は、堺利彦、幸徳秋水ら社会主義者とは決定的に異なっていた。[28]かれをして「非戦論者にしたものの中で最も有力なるものは、申すまでもなく聖書」であった。日露戦争が終った直後に、かれはこの戦争からうけた「利益」として、つぎのように書いている。

「私は今は非戦主義者であります。かつてはオリバー・クロンウェルを私の理想に最も近き人として仰ぎし私は、今は戦争の罪悪と害毒とを唱えてやまざる者であります。私は、戦争はキリスト降世二千年後の今日、文明国の間にあるべからざるものと信ずる者であります」。[29]

このように「義戦論」から「非戦論」への転向の過程において、かつて内村の敬愛を一身に集めたクロムウェル像に、明らかに大きな変貌

が現われている。転向の根拠を明示しているのは、開戦前に書かれた「平和の福音」と題する一文であって、そこではむしろクロムウェルこそが批判の対象とされ、マタイ伝二十六章をよりどころにして、無抵抗主義の平和論が説かれているのである。すなわち「剣に剱るのが……神に対する義務であると信じた」クロンウェルより「戦わずして自己の身を敵人に渡し、これを十字架につけたまいしキリストはさらにエライ人であ」ったと断言する内村は、「私どもキリスト信者は、クロンウェルを学ばずしてキリストを学ぶべきであ」るといい、つぎのように結ぶのであった。

「戦争はクロンウェルの場合においても決して無害ではありませんでした。クロンウェルの理想は、彼が血を流したゆえに、彼の死後四百年後の今日に至るも、いまだ世におこなわれません。のみならず、近ごろありし南阿戦争のごときにおいてすら、英国の主戦論者は例をクロンウェルに引いて、かの二十世紀の大恥辱と称せられる、残忍をきわめし南阿戦争を続けました。戦争は正義に達するための捷径のようで、実は極の廻り道であります。自由と平和と独立と一致とに達する最捷径は、キリストご自身の取られた道で、すなわち無抵抗主義であります。これは聖書が最も明白に示す主義でありまして、自称キリスト教国なるものがこの理想と相距るはなはだ遼遠なるは実に歎ずべきことであります。武装せるキリスト教国？　そんな怪物の世に存在しようはずはありません。武装せるものはキリスト教国ではありません。武装せる者は強盗であります。[30]」

ここに内村の無抵抗主義の非戦論の論理が明白に語られている。日清戦争後の世界史の動向から歴史の教訓を読みとった内村は、カーライルを媒介として築かれたクロムウェル像の一面性を認識し、聖書に示された原点に立ち帰って、非武装無抵抗を唱えるに至っている。そして「自称キリスト教国」の虚偽に向かって批判の刃を向け始めるのである。それは内村にとって、理想の幻滅の認識であり、より具体的には「ピューリタンの消滅」の認識でもあった。内村の信仰形成史を詳しくたどる余裕はないが、かれとクラークの出会いが「武士道とピューリタニズムの出会い」という性格をもつものであり、また「高貴な信仰的な、清教徒的（ピューリタニック）な」先入感のもとにアメリカへ渡ったかれの体験と観察は、『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』（英文版刊行明治二十八（一八九五）年）を通して、われわれには親しいものである。[31] 内村のピューリタニズム認識は、クラークを介するニュー・イングランドのそれが母国において受容され、その地への留学体験によってさらに純化されるいっぽう、カーライルの『クロムウェル』という絶好の触媒をえて、視野を大西洋の彼方のイギリスへと拡張し、いっそう揺るぎないものとへと昇華されたものであるということができよう。[32] その内村も、明治三十九（一九〇六）年になると、「ピュ

ーリタンの消滅」を嘆かねばならなかった。それは内村の信仰にとって新たな地平を開くものであると同時に、日本人のアメリカ、イギリス両国に対する認識にも、大きな変動が生まれつつあったことを示唆するものである。

「余輩はピューリタンを尊敬す。彼は実にプロテスタント教の精華なりき。彼ありしがゆえに地球の一変せしことは、余輩の充分に認むるところなり。されど悲しいかな、ピューリタンは今や米国よりその跡を絶ちつつあり。その本拠の地たる新英州すら、今やピューリタンの所有にあらず。ピューリタンはは今や米国の主人公にあらず。その政府も議会も、しかり、多くの場合においてはその学校も教会も、ピューリタン以外の者の支配するところとなれり。われらが米国を迎えしは、ピューリタンの米国を迎えしなり。しかるに今やピューリタンは無きにひとしき者となりて、米国はわれらにとりて、精神的に全く要なきものとなれり。われらは、われらの師たりしピューリタンと共に、米国今日の堕落を歎く者なり」(33)。

(1) 平田久『カーライル』二〇〜八九ページ。
(2) 内村鑑三『後世への最大遺物』、明治三十六（一九〇三）年、（『内村鑑三信仰著作全集』第一巻、二五一ページ）。以下内村の著作からの引用はすべてこの版により、『信仰著作全集』と略し、また著者名も省略する。
(3) 「読書余録」（『信仰著作全集』第二十巻、一二六〜七ページ）。
(4) 小沢三郎『内村鑑三不敬事件』、一九六一年、新教出版社、五七ページ以下を参照。「内村が読んだ、カーライルの『クロムウェル伝』は英国版五冊ものとのことである。東京女子大学にある新渡戸稲造文庫に、次の英国版五冊ものがある。これが内村が読んだ五冊ものと同一か否か著者には目下断定出来ない。Thomas Carlyle; Oliver Cromwell's Letters and Speeches: With elucidations, 5 vols, Chapman and Hall, London, 1871-2」とは小沢氏の注記（六一ページ）であるが、Abbott, W.C.; *A Bibliography of Olivr Cromwell*, 1929 によっても、一九〇四年にファース（C.H. Firth）の序文のついた決定版（S・C・ロマス編）が刊行されるまでに、少くとも二十の異本が出ていることが知られるのみで、内村の読んだ版は確定できない。
(5) 「余の学びし二大政治書」、明治三十三（一九〇〇）年、『万朝報』、（『信仰著作全集』第二十一巻、一九四〜九ページ）。
(6) 「ダンバーの戦争」、『愛吟』（『信仰著作全集』第五巻、一七四〜七ページ）
(7) 『宗教と文学』、第一章「カーライルを学ぶの利と害」、（『信仰著作全集』第五巻、二六〜四二ページ）。
(8) 内村は、「余輩さきに地方にあるや、東京の文士某、年なお若きに書を著わしてカーライルを伝し、三十七冊の著わが眼中にありと言えるを聞き、カーライルを読むにおいては余輩多く人後に落ちざらんことを期せしに、なんぞ図らん、この若年の文士に劣ると一驚を喫し、後、その書の翻訳なりしを知るに及んで、さらに一驚を加えたることあり」と書いている（同上、二八ページ）。ここで言及されているのは、おそらく前にみた平田久『カーライル』であろう。なお内村につづけて「余輩の知友中、最もよくカーライルを知れる者は、札幌農学校教授ドクトル新渡戸稲造なり。しかして彼が最も熟読玩味せるは『サルトル・レザルタス』および『仏国革命史』なり。カーライル学を研究する者の中にともかくのごとく各専門を生

ず。またもって斯学の容易ならざるを見るべし」といっている。

(9)、(10) 同右、三一、三二四ページ。

(11) 「人物崇拝の害」、『東京独立雑誌』明治三十二（一八九九）年一月、（『信仰著作全集』第二十四巻、一九～二一ページ）。

(12) 「弁明」、『東京独立雑誌』明治三十二（一八九九）年五月、（『信仰著作全集』第二十三巻、七一～二ページ）。

(13) 「真正の兄弟」、『聖書之研究』明治三十五（一九〇二）年九月、（『信仰著作全集』第十九巻、二六七ページ）。

(14) 『キリスト信徒のなぐさめ』、明治二十六（一八九三）年、（『信仰著作全集』第一巻、四六～七ページ）。

(15) 「未来観念の現世における事業に及ぼす勢力」、『基督教新聞』明治二十四（一八九一）年、（『信仰著作全集』第十三巻、二三四～七ページ）。

(16) 「信州東穂高講談会講演大意」、『聖書之研究』明治三十四（一九〇一）年十二月、（『信仰著作全集』第二十二巻、一三八ページ）。

(17) 「クロンウェルの宗教」、『聖書之研究』明治三十四（一九〇一）年十月、（『信仰著作全集』第二十二巻、八一～六ページ）。

(18) 『外国語の研究』、明治三十二（一八九九）年四月、（『信仰著作全集』第五巻、一九五～六ページ）。

(19) 一例として内村の発言をあげよう。「十七世紀の英国の革命なるものが宗教的革命でありしことは、少しでも世界歴史を読んだ者の疑うことのできない事実であります。」（「日本国の大困難」、『聖書之研究』明治三十六（一九〇三）年三月、『信仰著作全集』第二十四巻、一九一ページ）。

(20) 「摂理の事」、『東京独立雑誌』明治三十三年五月、（『信仰著作全集』第十四巻、一二五ページ）、「伝記学の研究」、『世界之日本』明治三十年十一月（『信仰著作全集』第二十三巻、一七九ページ）など。

(21) 「余の学びし二大政治書」、（『信仰著作全集』第二十一巻、一九八ページ）。

(22) 「完全なる小人」、『東京独立雑誌』明治三十一年十月（『信仰著作全集』第二十三巻、一八九ページ）。

(23) 『後世への最大遺物』、（『信仰著作全集』第一巻、二三八ページ）。

「公平なる歴史家は言う『クロンウェルは英国における憲法政治の基礎を定め、その大膨脹の端緒を開けり』と。剣に血塗るにはばからず、国家の存在をも犠牲に供せしオリバー・クロンウェルは、英国百年の栄光と平和とを来たし、地球表面六分の一を英の領土に加うるの開路者となりぬ」（「時勢の観察」、『国民之友』明治二十九（一八九六）年八月、（『信仰著作全集』第二十四巻、七五ページ）。

ちなみに同じ文章には、初期の内村がクロムウェルの人物を説明するのにしばしば用いた西郷隆盛との類似性の強調がみられる。そしてこのような比較論の原型は、『代表的日本人』（英文の原文は明治二十七（一八九四）年発表）にある。「西郷の偉大さはクロンウェル的であって彼は単に清教徒主義（ピューリタニズム）を知らぬばかりに清教徒（ピューリタン）たり得なかったのだと、私は思う。西郷の場合は、意志の力が大いにものを言ったのである。すなわち、同じ偉大さでも、これは道徳的の偉大さであって偉大さの中で最高のものである。彼は、正しい道徳的基盤の上に、国家を再建しようと努め、これにやや成功したのであった。……西郷よ起きよ。クロンウェルよ、起きよ」（『信仰著作全集』第六巻、四六～七ページ）。このようなクロンウェルと西郷の類似性の強調は、明治三十年代に入ると後退する。それはおそらく後述する非戦論の認識の深化と直接関わりあうものであったと思われる。しかし晩年の内村は、ふたたび「武士道の模範として西郷隆盛を選み、キリスト教のそれとして、英国のオリ

バー・クロンウェルを選み」比較論を展開している（「武士道とキリスト教㈡」、『聖書之研究』大正十二（一九二三）年七月、『信仰著作全集』第二十三巻、一八六～九〇ページ）。なおクロンウェルとの異質性のゆえに批判を蒙っているのは、板垣退助である（「『自由党総理』板垣伯」、『東京独立雑誌』、明治三十一（一八九八）年十二月、『信仰著作全集』第二十二巻、一七五～六ページ、および「時勢の要求とキリスト教」『聖書之研究』、明治三十五（一九〇二）年七月、『信仰著作全集』第十五巻、二四七～五〇ページ、の二論文を参照）。

(24) 「日本国の天職」、『六合雑誌』明治二十五（一八九二）年四月、（『信仰著作全集』第二十四巻、一七～二六ページ）、および「日清戦争の義」、『国民之友』、明治二十七（一八九四）年九月、（『信仰著作全集』第二十一巻、一二一～八ページ）。

(25) 「余が非戦論者となりし由来」、『聖書之研究』、明治三十七（一九〇四）年九月、（『信仰著作全集』第二十一巻、八九ページ）。

(26) 「日清戦争の義」、『信仰著作全集』第二十一巻、一二七ページ。

(27) 「余が非戦論者となりし由来」、『信仰著作全集』第二十一巻、八九ページ。つづけて内村は、「米西戦争によって米国の国是は全く一変しました。自由国の米国は今や明白なる圧制国とならんとしつつあります」という。このアメリカ観の変質については後述参照。

(28) 内村の非戦論については、藤井松一「戦争観と平和観」（『近代日本思想史大系(1)、近代日本社会思想史Ⅰ』）、『近代日本とキリスト教―明治篇』二六五ページ以下などを参照。

(29) 「日露戦争より余が受けし利益」、『新希望』明治三十八（一九〇五）年十一月、（『信仰著作全集』第二十一巻、六六ページ）。

(30) 「平和の福音」、『聖書之研究』明治四十三（一九〇三）年九月、（『信仰著作全集』第二十一巻、三〇～二ページ）。

(31) 本書には、「『頑強に』清教主義の教義を支持する」内村が、デラウェア出身の聖公会派の青年医師と親しく交っても、「オリヴァー・クロンウェルに対する無限の崇敬と清教徒的キリスト教の有する貴重な真理への愛」が揺るがなかったことが、誇らしげに語られているし、また同書中には「オリヴァー・クロンウェルに見るような、英雄的行為とやさしい心、才能と無欲な心、常識と情熱的な宗教的確信との結合が、非キリスト教国に存在しようとは、想像することもできない」とか、「イギリス人ではあるが、わが理想の紳士にしてクリスチャンなるジョン・ハンプデン――彼の英雄的行動も、その深遠な神学上の確信に基づくものではなかったか」という叙述がある。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、（『信仰著作全集』第二巻、九三～四、一四八、一二八ページ）。

(32) 内村はアマースト大学在学中、モース（Anson D. Morse）教授について歴史学を学び、「僕ハイマ『清教英国ノ歴史』ヲ読ミ居レリ、英国史ノコノ時期ノ主人公タチハ多クハ僕ノ理想ノ基督教徒ニ最も近シ」という英文書簡を、ストラザースあてに書いている（小沢、前掲書、五九ページ）。それは明治二十（一八八七）年、内村二十七才のときであった。

(33) 「ピューリタンの消滅」『聖書之研究』、明治三十九（一九〇六）年九月、（『信仰著作全集』第八巻、二三四ページ）。

（補註1）　本文において植村正久のカーライル論を「おそらくもっとも早」い紹介と書いたが、前年の明治二十二（一八八九）年に、竹越与三郎が「トーマス・カアライル」を『六合雑誌』（十二月十七日）に発表している。それは『明治文学全集――第三十六巻、民友社文学集』（筑摩書房、一九七〇

年）でみることができるが、短文でありながらカーライルの性格と主張を的確にまとめており、竹越がイギリス文献を消化するのに秀でていたことをはっきり物語っている。文中クロムウェルについては、つぎのような叙述がある。「彼好んでクロムウェルの為に辨じ、清教徒の為めに辨ず、曰く彼等は世の嘲を受たり。然れども漫に之を嘲るを止めよ、彼等は何事を為したるかを見よ。彼等は小児の如く泣いて、寂天漠地の亜米利加の野に往き、ソコに彼等が神より授けられたる大業を遂げて、天下古今の大人となれり、彼の長生して大人となりたるは、即ち自然が彼を用ひたるを示す者にあらずやと、カアライルもまた十九世紀の清教徒と云ふべし、」（同上書、一二三ページ）。また翌年の『国民之友』第七八、七九、八一号（明治二十三年）には、物理学者ジョン・ティンダル（John Tyndall）が同年一月の The Fortnightly Review に発表した「トマス・カーライル」の抄訳が連載されている。

（補註2）平田久（？～一九二三）は、同志社に学び、民友社人としては古い方に属し、『国民之友』、『国民新聞』の編集にあたっては、蘇峯の片腕として活躍したが、明治三十年代初めに蘇峯と訣別し、のち実業界に入った。（補註1）に記した『民友社文学集』には、平田の「新聞記者の十年間（抄）」が収められている。